

未来につなげる しまねの幼小連携・接続



幼児期の遊びの中での子どもは、「小さな科学者」といわれます。生まれてすぐから、子どもは親しい大人や身近な物との関わりを通して、人との関わり方や探求心などを積極的に身に付け、よりよく生きようとしています。

そんな子どもが、生涯にわたって、よりよい生活や学びができるようにしていきたいと願います。



島根県幼児教育センター
(島根県健康福祉部 島根県教育委員会)

なぜ幼小連携・接続をしないといけないの？

幼小連携・接続の取組は、学習指導要領等改訂により、「生きる力の育成」を重視することとなった平成元年の改訂から始まり、一般的に小学校に慣れることを目的とし、子ども同士の交流を図ることを中心に行われました。こうした取組が、平成29年の学習指導要領等改訂に伴い、幼児期から高等学校卒業までの一貫した教育の中の1つとして位置づけられました。

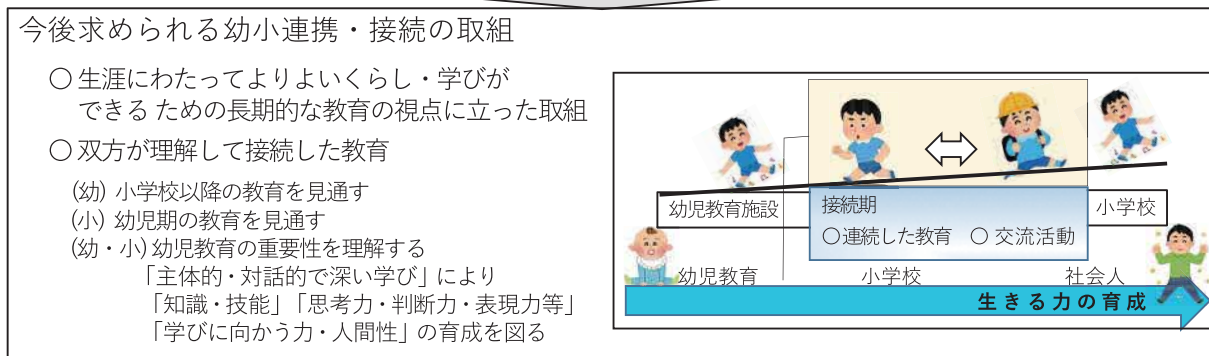
社会の急激な変動により、自ら問いを立て、多様な人々と協働しながら、粘り強く新しい価値を見出したり、様々な知識や技能、思考力を総動員したりし、問題などを解決していく資質・能力が必要となっています。また、乳幼児期の子どもを取り巻く環境も変化し、様々な資質・能力が子どもに身に付いていないという課題も見られます。



【平成時代からの課題の継続】 ○ 幼児教育と小学校教育の違い ○ 発達の後退・停滞傾向

【幼児教育における新しい課題や状況】
 ○ 科学的根拠に基づく幼児教育の重要性が世界的に広がる ○ 社会の急激な変化による子どもの発達の課題が重視される
 ○ 幼児教育施設から入学する子どもの割合が増加し、幼児教育施設と小学校との連携・接続の重要性が高まる

小学校に慣れるための取組から、生涯を通じた人格形成、学習の基盤の形成としての取組へ



(コラム)

幼児教育、特に5歳児期で培った資質・能力を存分に活用し、生活や遊びの中で芽生えた興味・関心などを教科に関連づけるなどの工夫された教育課程等がスタートカリキュラムです。

入学直後に、座学が始まるという姿は見られないはずです。

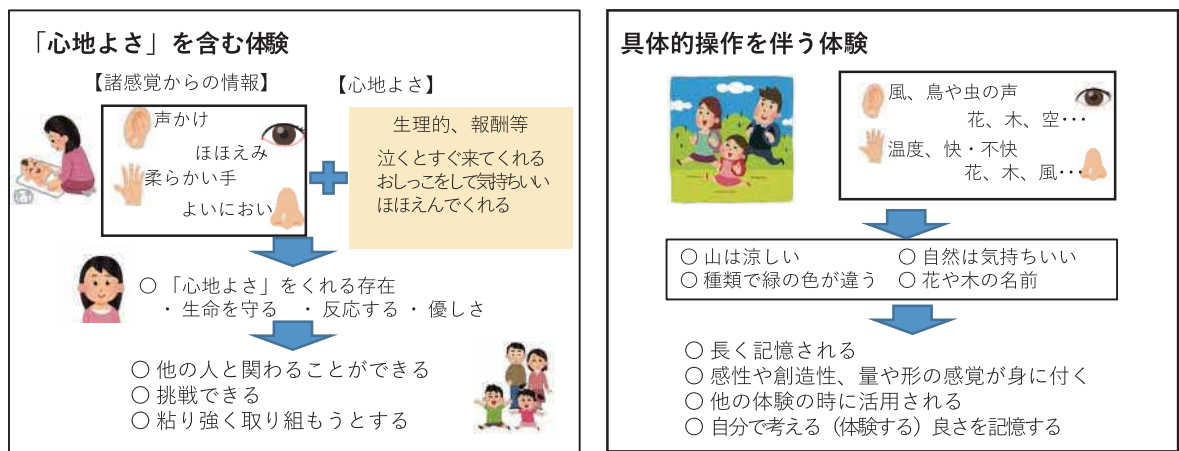
年長	小学校入学 →	2年生
<ul style="list-style-type: none"> ○ 予想や見通しを立てることができる ○ 仲間の意思を大切にしたい協同遊びができる ○ 満足するまで取り組もうとする ○ 思考力や認識力、様々なことへの興味・関心が高まる ○ 自立心が一層高まる 	<p>一人一人が安心感を持ち、担任や友達に慣れ、新しい人間関係を築いていく</p> <p>生活科を中心とした学習活動</p> <p>教科等の学習に徐々に移行し、特有の見方・考え方を身に付けていく</p>	<p>具体的、体験的な活動を通じた学び</p>

幼児期の子どもはどんな育ち、学びをするの？

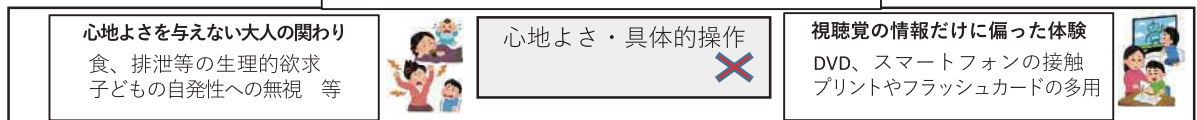
幼児期の子どもの発達、脳の発達とともに進んでいきます。身体の内外的からの刺激を受けると、様々な働きをする脳の部位の中から必要な部位をつなげ（「脳のネットワーク化」）、対応を図ります。特に、乳幼児期には、子どもを取り巻く環境との関わりでネットワーク化が活発に行われ、およそ8歳まで心や脳の発達が進みます。

乳幼児期特有の脳の発達、周りの大人が「心地よさ」を与えてくれる存在であると子どもが捉えられる体験、具体的操作を伴う体験をより多く行うことで、適切に行われます。

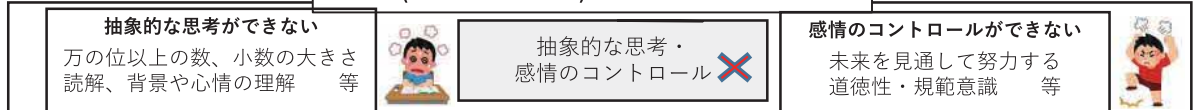
8歳まで、つまり小学校低学年までは、こうした「心地よさ」と具体的操作を伴う体験を確保することが、子ども一人一人の育ちや学びを促す最低条件と考える必要があります。



8歳(小学校低学年)までの不適切な体験



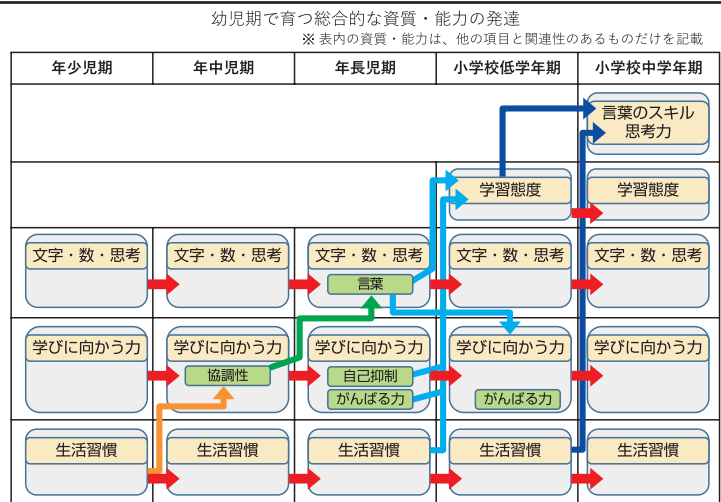
9歳(小学校中学年)以降の心や脳の発達



ヒトの発達の謎を解く（令和元年10月 ちくま新書明和政子）を参考に作成

(コラム)

近年の研究結果では、健康な生活を送ること、友達と共に遊ぶことを3、4歳までにしっかり行っておくと、思考力などの発達に結びつくことがわかりました。また、子どもの自発的な遊びが、学びに向かう力を養うとも言われています。



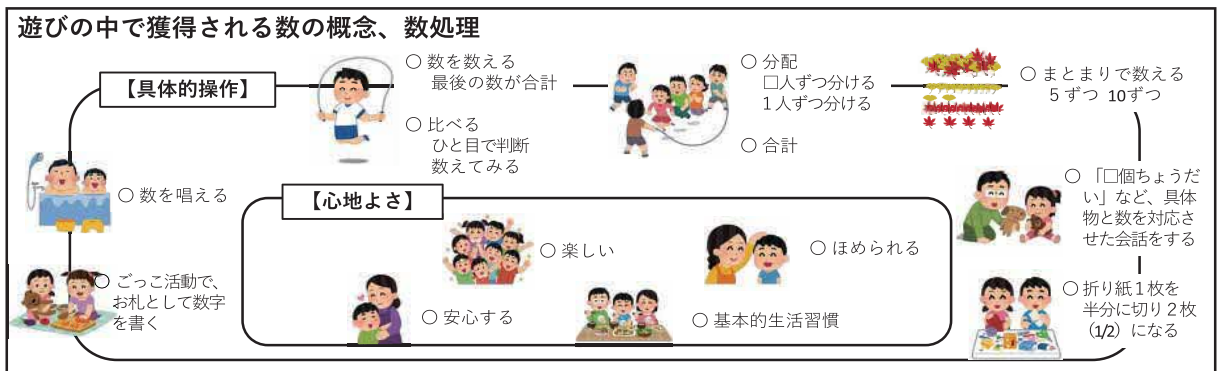
幼児教育施設では遊んでばかりいるんじゃないの？

子どもの遊びは、大人で考える「仕事」や「勉強」の対極的なものではありません。幼児期の子どもの脳の特有の発達を考えても、「楽しい」「やってよかった」という「心地よさ」と、体全体を使って具体的操作を伴う活動が確保された遊びは、子どもの発達を促す大切な行為です。

子どもの興味・関心や発達に応じた遊びにより、小学校以降の学習につながる知識・技能、思考力・判断力・表現力ばかりではなく、好奇心や自制心、協同性なども培うことができます。

「主体的・対話的で深い学び」により、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」を培うことが高等学校卒業まで求められていることを考えると、幼児期の主体性や社会性、さらに課題解決力を培う「遊び」は、重要な行為であると言えます。

入学までに「字を書く」「加減の計算ができる」ようにするといった早期教育よりも、重要な「学力」を身に付けていることを十分に理解する必要があります。



どれが1番遠くまで転ぶかな (4歳)

「わくわくすることをみつけよう」というテーマのもと、子ども一人一人が遊びをみつけて取り組む遊び

カップを重ねた物やガムテープなどを使い、遠くまで転がせるにはどうすればよいか試す。
一人で20分間、試行錯誤を繰り返した。
途中、友達と一緒に試したが、最終的には、自分が試して1番結果がよかったガムテープを選び、満足した表情をしていた。

みんなでおにごっこを楽しむ活動 (5歳)

①おにごっこを楽しむ → ②楽しむために必要なものをもみなでつくる → ③みんなでおにごっこするためにどうすればよいか

○タッチされておこるAちゃん
T「Aちゃんどうして怒っているのかな。」
C「わかってるよ。タッチされたからだよ。」 (A見うなずく)
T「くやしかったんだね。」
C「うん、わかるわかる。」 (T友達にどうしているか聞く)
C「タッチされて悔しいけど、次がんばろうってがまんする。」
C「私は泣くよ。でも次がんばろうって思ってもう1回やる。」

(コラム)

「遊び」により、様々な資質・能力が育成されます。入学後に、こうした力を発揮させるために「園ではどうしてたの?」「どうしたい?」と問うことが必要です。また、生活や遊びの中で興味・関心等を教科書に活用することも大切です。

自発的な遊びの中で育つ資質・能力				
○ 周りの探索活動	○ 玩具などを実物に見立てて遊ぶ	○ 日常生活のごっこ活動を楽しむ	○ 様々な物の特性を活かした遊び	○ 共通のイメージを持ち、役割がある協同遊び
自分で行ってみようとする	遊び込む中でやり遂げようとする		自分で考え行動する	
遊びの満足感の言葉を知る、使う	遊びの不満も言う 次の遊びの予定を立てる		めあてを意識して遊ぶ	
大人を介して、友達との折り合いをつける	気の合う友達との遊びで相手の気持ちに共感する	けんかなどしながら友達の良さに気付く	きまりの大切さを知り、守ろうとする	
0歳 6歳				

幼小連携・接続の取組って何をすればいいの？

幼小連携・接続の目的は、子どもの発達や学びの連続性を確保し、子どもに対し体系的な教育を組織的に行うことです。

そのためには、幼児教育施設と小学校が互いの教育について理解し、接続期にめざす子ども像を設定し、共有化したうえで、接続期の教育課程などを編成していく必要があります。

島根県は、小学校1校に入学する幼児教育施設が複数あり、さらに分散しているという特徴があります。そうした地理的条件に応じた取組は、大きく分けて2つに分かれます。1つめの子ども同士の交流が少ない地域は、教職員等の計画的な研修や授業等参観が実施され、接続カリキュラム作成が進んでいると言えます。また、子ども同士の交流が多い地域は、幼小が一体となって子どもを育成する風土が根付いているため、カリキュラム作成が進んでいない傾向が見られます。「接続カリキュラム編成・修正の手順例」を参考に、「一般」から「実態」に応じた取組へ変更することが大切です。

	子どもの発達や教育の理解	カリキュラム作成	子ども同士の交流
一般	<ul style="list-style-type: none"> ○ 講演会、書籍等での理解 ○ 10の姿での理解 ○ 保育活動、授業参観 ○ 保育、授業参観後の協議（10の姿の活用）（めざす子ども像の活用） ○ 保育体験（小学校教職員） 授業体験（保育者） ○ 子ども同士の交流で 幼小合同で指導 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各園・校の教育課程等 ・ 月案・週案 ○ 各園・校個別カリキュラム 市町村統一カリキュラム ・ 指導計画、単元配列 ・ 月案・週案 ・ 資質・能力系統表 ・ めざす子ども像設定 ※ 安心生活等できる工夫(小1) ○ 入学園、学校カリキュラム ・ 指導計画、単元配列 ・ 月案・週案 ・ 資質・能力系統表 ・ めざす子ども像設定 ※ 安心生活等できる工夫(小1) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 絵本などで紹介 ○ 手紙・DVD等での交流 ○ 小学校の施設、授業見学 ○ 小学校行事参加 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>※ 回数 ・ 年に1、2回 ・ 年間複数回の交流</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業等参加 ・ 受動的（お客さん扱い） ・ 能動的（質問準備など） ・ 合同活動 ・ 交流活動の活用 教育課程等に位置づけ 活動を広げたり、深めたりする
実態			

特別な配慮を必要とする子どもの情報交換、個別の教育支援計画

接続カリキュラム編成・修正の手順例	
C	<p style="text-align: center;">子どもの育ちと学びを知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 幼稚園教育要領等、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」をもとに子どもの姿を知る ○ お互いの活動のねらいや教職員の支援を知ったうえで、子どもの姿を見る
A	<p style="text-align: center;">めざす子ども像を共有する</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 幼児教育施設で、重点的に育成した資質・能力などを出し合い、入学当初にそれらが発揮されているか話し合う ○ 子ども、幼児教育施設・学校、地域の長所、課題を明確にし、重点的に育成した資質・能力を明確にする ○ 以上2つを踏まえてめざす子ども像を共有する
P	<p style="text-align: center;">接続カリキュラムを編成・修正する</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 共有化した「めざす子ども像」を、期ごとに具体化する ○ 「めざす子ども像」を実現する視点で、教育課程等を見直す
D	<p style="text-align: center;">接続カリキュラムをもとに実践する</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 幼児教育施設では、経験したことが小学校でどのような資質・能力につながるか、小学校では、学習することが幼児教育でどのような経験をしたのかを明確にして実践する ○ 子ども同士の交流では、子どもの自発性や具体的操作を伴う体験的な活動を重視しつつ、互いのねらい達成をめざす
C	<p style="text-align: center;">接続カリキュラムを評価する</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 幼小合同で、子どもの姿や保護者からのアンケート等を活用し、より客観的な評価を行う ○ 該当クラスの担任ばかりではなく、全教職員で評価を行う

本取組のポイント 1

本取組で特筆すべき点の1つめは、保育園の年長クラス、小学校の1年生の2年間をトータルして、幼小の教職員が育成する体制を構築していることです。それを可能としているのが、交流活動のねらいを「幼児期の終わりまでに育てたい姿（10の姿）」で表現していることです。このことによって、保育園側は小学校以降の育ちや学びを、小学校側は幼児教育について理解することができ、子どもの発達や双方の教育についての理解促進が見られました。



「名前書くね」



「苗植えはね」



事後の振り返り

子ども同士の交流 (年度初め、芋の苗植え活動のねらい)	
小学校	
園児にどんな約束を伝えるか	道徳性・規範意識の芽生え
目標や予定について園児に分かりやすく伝える	言葉による伝え合い
1年生としての自覚を持ち、はじめの会をスムーズに行う	自立心
事前に調べたことを基に活動を計画し、進行カードなどを作る	数量・図形、文字等への関心・感覚
園児と手をつないで歩く	協同性
園児に分かりやすく伝える	言葉による伝え合い
活動を通して感じたことなどを園児の前で発表する	思考力の芽生え 豊かな感性と表現
保育園	
はじめの会でしっかりと1年生の話聞く	道徳性・規範意識の芽生え
小学生と手をつないで歩く	協同性 言葉による伝え合い
活動を通して感じたことなどを小学生の前で発表する	思考力の芽生え 豊かな感性と表現

「10の姿」により、育成の方向性の共有化が可能

<事前の話し合い>

- お互いの活動目標とねらいを確認する
- 当日の流れと予想される子どもの姿を共有する
- 配慮事項や役割を確認する

「10の姿」により、2年を通じた育成について評価、検討が可能

<事後の話し合い>

- 活動目標やねらいに沿った子どもの姿を振り返る
- 当日の動画や写真をもとに振り返る
- 次回の活動についての概要を打ち合わせる

本取組のポイント 2

本取組で特筆すべき点の2つめは、PDCA サイクルを活用しながら、持続可能な取組にするための体制づくりを行ったことです。幼小連携・接続の取組は、属人的な面が大きく、特に小学校1年生の担任や管理職の姿勢によって違うことが見られます。

そうした状況を解消するために、子ども同士や教職員の交流ばかりではなく、カリキュラムについての共通理解や検証などについての計画を立てて、全教職員で取り組めるようにしています。



年度当初の研修



保育体験

持続可能な園内・校内体制の構築

- 1年目（令和元年度）
 - ・年度当初に保小連携の取組についての理解
 - ・保小連携・接続に係わる研修の実施
 - ・表現活動について
 - ・保育体験
 - ・スタートカリキュラムの見直し
- 2年目（令和2年度）
 - ・幼小連携・接続の担当教諭を設定
 - ・幼小連携・接続の共通理解
 - ・幼小連携・接続の公開授業の全職員参観、協議参加
 - ・保育体験と保小合同職員研修を実施

小学校教職員の保育体験の実施

- ① 園長によるオリエンテーション
 - ・0～6歳児の発達段階と育ち
 - ・保育園の理念・方針・目標
 - ・保育士の子どもへのかかわり方
 - ・日案の説明
- ② 教職員1人1クラスずつ保育体験
- ③ 意見交換

幼小合同研修の実施

- 県立大学福井一尊先生の授業参加と講義講義：「新学習指導要領をどうとらえるか」
～図画工作の現場から確認しておきたいこと～

益田市立豊川小学校、豊川保育園は、平成31年(令和元年)度、令和2年度の2年間、「島根県幼小連携・接続研究事業」に取り組みました。

本取組のポイント 3

本取組で特筆すべき点の3つめは、接続カリキュラム作成において、市が作成したものを実態に合わせて、改善したところです。益田市が作成したカリキュラムが、経験内容をもとにした「資質・能力」ベースであるので、幼小の教職員が検討する際に、実際の子どもの姿を見て、イメージしやすかったと思われます。

1年間を終え、子どもの育ちや学びを振り返り、より実態に応じたカリキュラムとなるよう検討を行うことで、持続可能な幼小接続が図れるようになったと思われます。

豊川保育園・小学校接続カリキュラム (益田市版保幼小接続カリキュラム)		
生活する力	健康な生活	食育
		排泄・衛生
	安全な生活	安全な生活
自立した生活		時間の意義
		身辺整理
かかわる力	人や地域との かかわり	友達との関係
		地域との関係
		あいさつ
	きまりを守る	規範意識
言葉で伝え合う	聞く・話す・伝える	
学ぶ力	豊かな体験	自然体験
		運動体験
		読書
	豊かな表現	創作・表現
	文字・数への感覚	文字・数・色・形への興味・関心
学びへの芽生え	学びへの芽生え	
環境構成		
個々の状態に合わせた職員の関わり方		
保幼小連携交流		
家庭との連携		
主な単元内容		

「かかわる力 人や地域とのかかわり 友達との関係」

5歳児アプローチカリキュラム (主な経験内容)

- 友達の力を借りたり励まされたりしながら難しいことでもやってみようとする。
- 共通の目的に向かって友達と考えを出し合い、折り合いをつけて一つのことを達成する。
- けんかやトラブルの経験から相手の思いに気づく。
- 経験したことを遊びに取り入れたり、友達とイメージを共有しあいながら遊びを楽しむ。

接続期のこどもにとっての段差

自分の興味関心が中心。 協調性が芽生える。	友達と協調して活動する。
--------------------------	--------------

小学校1年生スタートカリキュラム (主な経験内容)

- 隣同士や小グループでの活動を大事にし、徐々に学級や学年、異年齢交流などで多様な集団活動の楽しさを知る。
- 集団ゲームを通して、友人関係をつくる。
- けんかやトラブルの経験から対応について知る。
- 活動を通してお互いの良さがわかり合えるようにする。

本取組のポイント 4

本取組で特筆すべき点の4つめは、幼小連携・接続の取組を保護者、地域へ発信していることです。本保育園、小学校は、「社会に開かれた教育課程」の実現のためのコミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進を図っていることもあり、家庭、地域が一丸となって子どもを育てる風土が根付いています。

それに加え、本取組を発信することで、保護者ばかりではなく、地域住民も共に、幼児教育から連続した教育を行っているという一体感を生むこととなります。そのことは、近年課題となっている「子育ての孤立化」(孤育て)を解消し、子どもが安心して自らの力を発揮することができることを意味しています。

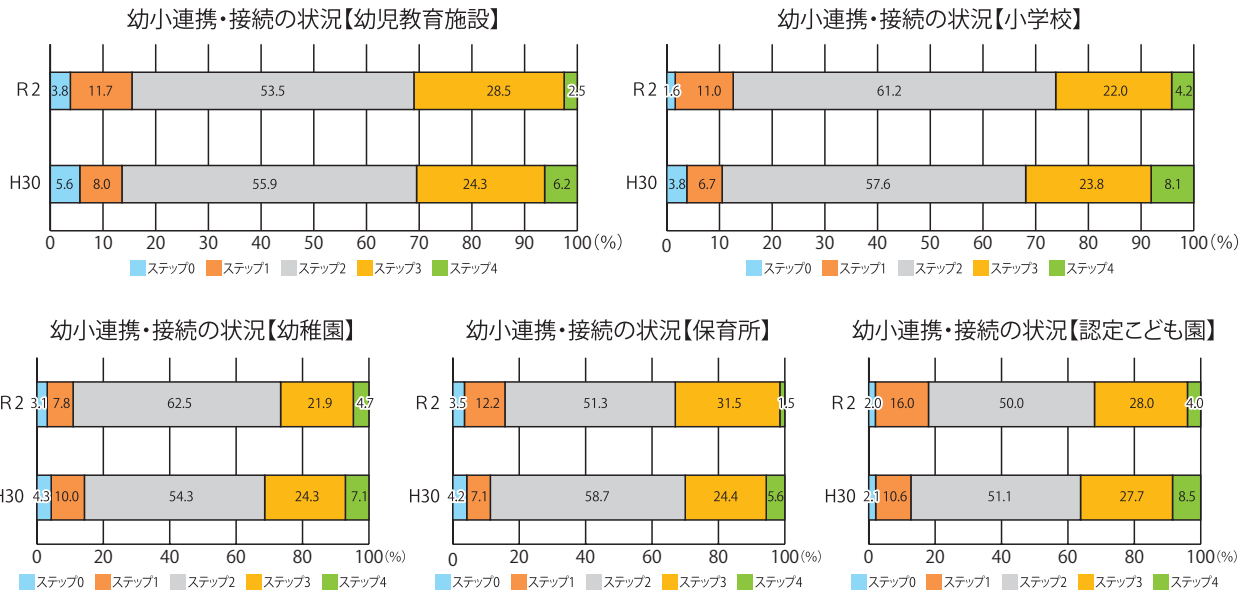


保護者向け園(校)だより

島根県の幼小連携・接続の取組の現状は？

島根県では、接続を意識した教育課程等の編成を、小学校で90%、幼児教育施設でおよそ80%実施しています。

一方、幼小連携・接続の取組は、子どもや教職員の交流は実施しているが、それらを踏まえた接続カリキュラムの編成まではされていないという段階（ステップ2）が1番多く、子どもや教職員の交流を活用し、それぞれで編成した接続カリキュラムを修正することが必要だと考えられます。



ステップ0

連携の予定・計画がまだ無い。

- 地方公共団体が連携の重要性を理解するための教職員向け説明会・研修会等を開催するなど、連携に向けた環境づくりが必要。また、連携・接続のために各学校・施設同士の合意ができる環境を整えていくことが必要。

ステップ1

連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。

- 教育委員会等の支援のもと、各学校・施設に担当者を置き、定期的に意見交換会を開催。意見交換の中から、交流授業、行事などを企画・実施し、子ども同士の交流、教職員の交流を推進。その際、各学校・施設では全教職員の理解と協力のもとで行われるよう留意。

ステップ2

年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。

- 年数回程度の授業、行事、研究会などの交流を年間指導計画などに位置付けて実施。事前だけでなく事後の反省・検証を行うことが必要。教育委員会等の主催・支援のもと、接続を見通した教育課程の編成・実施に向けた取組を開始。

ステップ3

授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。

- 恒常的な授業、行事、研究会などの交流に発展。連携の実践を踏まえ、接続を見通した教育課程を編成・実施。

ステップ4

接続を見通して編成・実施された教育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。

- 接続を見通した教育課程を編成・実施するとともに、学期末ごとや年度末に事後の反省・検証を行うことにより、PDCAサイクルを確立し、次年度以降の改善を実施。

担当

島根県幼児教育センター
島根県松江市殿町1番地
島根県教育庁教育指導課地域教育推進室内

TEL 0852-22-6867

FAX 0852-22-6026

島根県幼児教育センター

検索